

特集

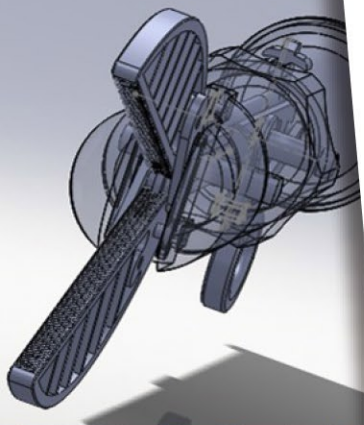
# 長崎大学 ブランドの 人材育成

NAGASAKI UNIVERSITY BRAND

長崎大学では、長崎の歴史や地理を活かしながら、<sup>\*</sup>教育理念に基づいた教育・研究を行い、幅広い知識の涵養を図っています。

他大学とは一線を画したグローバル人材育成プログラムの中には、長崎大学特有のコースや特色あるプログラム、全国的に注目されているプロジェクトがあります。「長崎大学ブランド」が意味するものとは何か。どのような人材が育成されているのか。実際にそこで学ぶ学生にスポットを当てながら探っていきます。

※長崎大学の教育理念  
実践教育を重視した最高水準の教育を提供し、幅広い視野と豊かな教養及び深い専門知識を備え、課題探求能力及び創造性に富んだ人材を養成し、もって地域及び国際社会に貢献すること







# これからの日本の地域医療を担う人材を育成

## 離島実習 医学部／歯学部／薬学部

**長** 崎大学の医学部、歯学部、薬学部には、他大学にはない珍しい実習があります。それが離島実習。五島市の五島中央病院の一角にある、長崎大学の「離島医療研究所」を拠点に行われています。前田隆浩所長のお話です。

「五島や対馬に加えて、昨年から老岐にも拡大して長崎県の離島全体をカバーできました。私たちは十二年前にこの離島実習を立ち上げましたが、文部科学省の医学教育モデル・コア・カリキュラムには、平成十九年から地域医療教育が盛り込まれました。待たなしの高齢化のなかで患者さんの病態も慢性化・複雑化しており、ニーズは多様化・高度化しています。それらをマネジメントできる医療人を育てるために地域医療教育が必要だということ。離島の高齢化は全国平均より進んでおり、保健（予防）と医療と福祉（介護）の

多職種連携を学ぶには非常に良い現場です。行政や医療・福祉関係の方々のご協力のおかげでネットワークも広がりました」。

現地でのコーディネートは小屋松淳助教が行います。取材時はちょうど住民健診の真っ最中。身体測定やレントゲン検査に加え、動脈硬化などの生活習慣病を調べるもので、本年度から始まった先進予防医学共同専攻（共同大学院）の疫学研究を兼ねています。一日で何か所もまわるため、マンパワーが必要で、先生を中心に歯学部、薬学部の学生がサポートに入っていました。一方、医学部はこの日、民間の診療所での実習です。診察をする山内診療所の関田孝晴医師は、患者さんの目を覗き込むようにしてゆっくり問いかけます。傍らには、医学部五年生の高木寛さんと三谷紗貴さん。「地域医療の大切さは実際に見ないとわからないです

ね。健診ではチームで協力し合うことも学びました」と高木さん。三谷さんは「地域に貢献できる離島医療に関心を持っています。思った以上に高齢の方が多くて、いつもより大きな声でゆっくり話すよう心がけています」とのこと。

翌日は歯学部六年の遠藤諄俊さんが、船で福江島から久賀島に渡り出張診療する米山須弥也歯科医に同行しました。無菌科「医地区だった久賀島では、虫歯になるとすぐ抜いてしまうため入れ歯を使用する率が高く、同じものを何十年も使い続けるケースもあったそうです。一年前離島実習がきっかけで新しい歯科診療所が三つの島に誕生し

ました。米山先生のお話です。「開業直後は入れ歯を作り直す方が多かったですね。島での診療は週に一回。痛くなったらすぐ診るといっわけにはいかないので、細やかな診療を心がけ、抜歯もなるべく控えます。学生さんには、患者さんとのコミュニケーションの取り方を見てほしい。治療の手法は後から身につけてくるものですから」。

高年齢の先進地域である離島での実習は、全国で最も多くの島を持つ長崎県の大学だからこそできること。目の前の患者さんを総合的に診て、治療後の生活まで考える多職種連携の現場を経験することで、学生たちは地域医療の実際を学んでいきます。

富江町での健診の様子。「学生には医療者としての基礎に加え、地域のコミュニティのなかでのふるまい方や働き方を学んでほしいですね。学生実習となると患者さんや利用者さんからの注目も高く、それにふさわしい格好や言動が必要です」と小屋松先生（右写真中央）。

### 離島医療・保健実習の実施施設

**対馬市**  
長崎県対馬病院  
豊玉診療所  
対馬市福祉保健部  
特養わたづみ  
対馬市社会福祉協議会  
対馬保健所  
あすか訪問看護ステーション  
地域活動支援センターきらり

**新上五島町**  
長崎県上五島病院  
有川医療センター  
新上五島町社会福祉協議会  
新上五島町健康保険課  
老人保健施設つくしの里  
あおかた薬局  
そうごう薬局 上五島店  
鈴木薬局  
ありかわ調剤薬局

**小値賀町**  
小値賀町診療所

**五島市**  
長崎県 五島中央病院  
聖マリア病院  
井上内科小児科医院  
みどりが丘クリニック  
奈留医療センター  
久賀診療所  
三井産科診療所  
山内診療所  
玉の浦診療所  
伊福貴診療所  
横山歯科医院

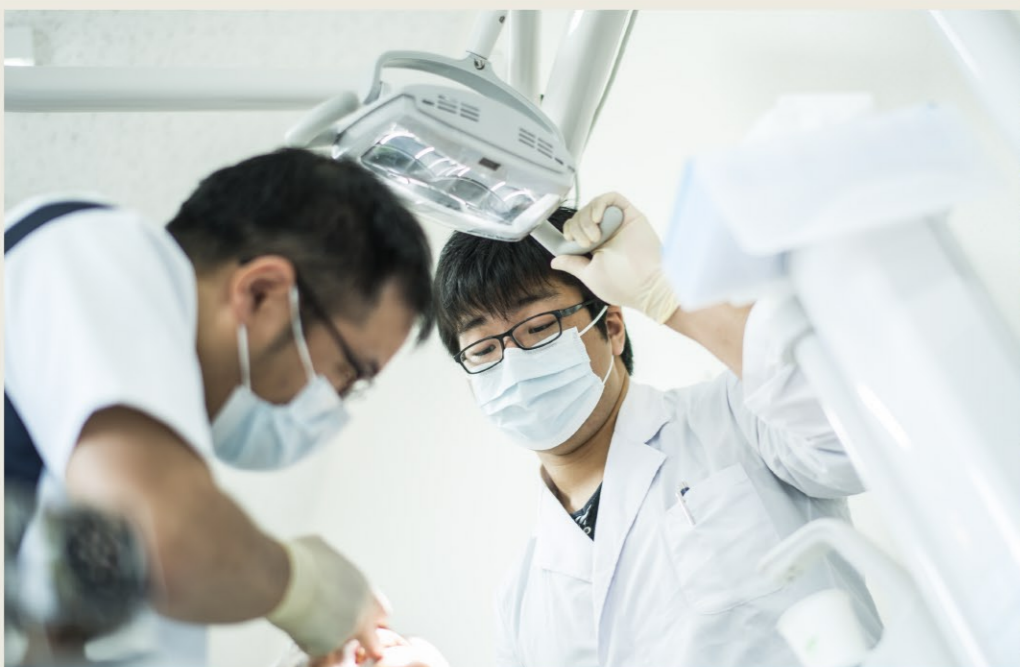
**長崎県**  
長崎県老岐病院  
光武内科 循環器科病院  
三島診療所  
原島診療所  
老岐市保健環境部 健康保健課  
介護老人保健施設光風  
在宅ケア総合支援センター  
長崎県老岐保健所

**長崎県**  
こまき歯科医院  
久賀歯科診療所  
鏡宿歯科診療所  
近藤歯科医院  
五島市健康政策課  
五島市長寿介護課  
五島市社会福祉協議会  
五島保健所  
サポートセンターきらり  
訪問看護ステーションくえ

**長崎県**  
授産施設ふれあい  
只野王  
福江薬局  
あい調剤薬局 南町店  
ゆうとく薬局  
社快堂薬局  
桜町調剤薬局 三井薬店  
富江薬局  
あおぞら薬局  
ニック調剤薬局



富江町での健診の様子。「学生には医療者としての基礎に加え、地域のコミュニティのなかでのふるまい方や働き方を学んでほしいですね。学生実習となると患者さんや利用者さんからの注目も高く、それにふさわしい格好や言動が必要です」と小屋松先生（右写真中央）。



米山先生（左）の治療を見守る歯学部の遠藤さん。「離島医療に関わる医療者は、みんな優しくおやかです。豊かな自然のなかで人と関わることでそういう心持ちになるのかもしれない。実習では、大学と違い材料が制限されているので材料の応用を学べます」。治療の合間には「さっきのように初めての患者さんの場合はね…」と実例に即したアドバイスも。



山内診療所での実習の様子。関田先生（左）の診療を見守る高木さん（右から2番目）と三谷さん（右）。1週間の滞在中、診療所や保健所、福祉施設など様々な現場を体験します。小屋松先生によれば、今では卒業生が地域の現場で働くことを選択するケースも増えたそうです。12年間の成果の一つです。



海上タクシーで久賀島に降り立ち、歯科診療所へ。





NAGASAKI UNIVERSITY BRAND

2

# オランダの歴史といまを学び、世界で活躍する人を育てる

## オランダ特別コース — 多文化社会学部



ヴィオラを弾くのが趣味という山本さん。アムステルダムでのコンサートへボウ管弦楽団を生で聴くことも楽しみの一つだそうです。楽器も持参するつもりだが、「たぶん、寂しくて弾きたくなりそう(笑)」。



ライデン大学の様子。キャンパスは街のなかに混在しています。



このコースではライデン大学から招聘した先生によるオランダの歴史や文化の講義があります。写真はボイケルス先生による2年生のオランダ文化に関する講義。

### オランダ特別コースの流れ

- 1年次 トランジションプログラム、短期留学、英語、オランダ語
- 2年次 オランダ文化論(英語)、オランダ現代社会論(英語)、オランダ語
- 3年次 日蘭比較文化、日蘭交流史、後期よりライデン大学留学(約1年間)
- 4年次 ライデン大学留学(前期)、特別研究



○一四年度からスタートした多文化社会学部のオランダ特別コースは、日本で唯一オランダに特化したコースです。オランダを学ぶ意義とは？

このコースで日蘭交流史を教える木村直樹教授にお聞きしました。

「高校生にとってオランダはあまりなじみのない国かもしれませんが。しかしEU結成の原動力となったり、国際的な物流や情報・金融において、オランダの果たす役割はとて大きなものです。また国際機関なども多く存在します。オランダを学ぶことは、三つの意義があります。一つ目はヨーロッパについての政治・経済・文化のエッセンスがオランダには詰まっていますので、それをオランダを通して学ぶことは重要です。オランダを理解すれば、ヨーロッパが見えてきます。二つ目は、日本の未来のために、いち早く同様の

の調査方法、行政資料の読み方などを他の3コースの学生と一緒に学びます。それと同時にオランダの歴史や文化、オランダ語の講義を受けながら自分のテーマを探します。大変ですがみんながんばっていますよ」。

しかもこのコースは、三年次後期から名門ライデン大学へ一年間留学することが義務付けられています。今年八月からライデンへ旅立つ一学期生の一人、山本瑞穂さんのお話です。

「一年次でオーストラリアに三週間の短期留学をしたのですが、今度是一年間なので覚悟を決めないと…(笑)。オランダ語ももうひとがんばりします。私自身は十八世紀後半から十九世紀の日蘭外交史をテーマにしています。ハーグの文書館でオランダ商館長の記録などオランダの資料を原文で確認する予定です。日本側の視点で外交史を研究す

課題の解決に取り組んできたオランダを知ること。ここでいう課題とは、例えば移民の受け入れ、安楽死やLGBT(性的少数者)政策などで、オランダは実験的に大胆な政策を打ち出しています。これらの先進事例を学ぶことで、近未来の日本が直面したときに役立つのです。三つ目は日蘭関係から現代の日本を見直すことができるということ。日本が西洋の思想や技術を受容して近代国家の基礎を築くなかで、オランダは大きな影響を及ぼしました。その過程を学び、日本の社会を検証するには格好の場といえます」。

三つとも日本のなかだけではなかなか学べない視点を鍛えることになりましたね。

「しかしオランダはあくまで素材。料理方法とも言うべき学習手法は、多文化社会学部のさまざまな分野の教員が教えます。英語はもちろん、フィールドで

るとしても、オランダ側の状況も知っておきたい。そのためには、ライデン大学ではオランダ史入門の講義も取るつもりです」。

オランダでの留学期間中にはインターンシップも体験できると木村先生。

「日系企業とマッチングしている最中ですが、現地で働く体験を通して将来の選択肢も広がります。おそらく、あちらに行けば日本とは違う問題意識のありように最初は面食らうでしょう。その違いこそが、異なる文化の人同士が接触するときに乗り越えなければいけない壁のようなもの。そのうえで、自分の考えを順序立てて発言できるようにになれば、それでいいのではないでしょうか」。

社会の多様性を理解し、自身の考えを主張しながら世界を舞台に活躍する——そんな人材が、着々と育ちつつあります。

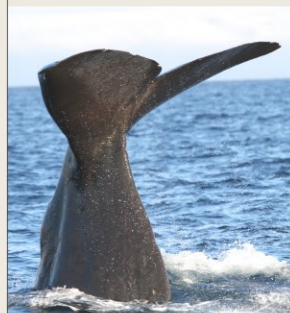


文教キャンパスの附属図書館には、日蘭学会から譲り受けた膨大な日蘭関連の資料や書籍があります。



# 海洋哺乳類の解剖を通じ 生物の進化や環境保全を学ぶ

イルカの解剖実習 ― 水産学部(海洋生産管理学科コース)



**海** に開かれた日本にとって水産学は非常に重要ですが、国立大学で水産学部があるのは全国で三カ所のみ。そのうち、クジラやイルカといった海洋哺乳類の解剖をカリキュラムのなかで行っているのは長崎大学だけです。専用の冷蔵庫や解剖室もあります。日本でも数少ない海洋哺乳類専門の研究者の一人、水産・環境科学総合研究科の天野雅男教授のお話です。

「先日、長崎市南部に打ち上げられたクジラを解剖しました。イルカやスナメリは死んでから間もない状態で頻繁に入手できるので、毎年、長崎で全国規模の調査や研究会が行われます。これはスナメリが生息する大村湾や有明海、イルカがいる天草灘などが近いという長崎の地の利が大きいでしょう。二十年以上にわたり漁業者との良好な関係が築かれているうえ、海と人間の居住地域が近く、死んで漂着

「イルカは哺乳類ですが、バツと見は、魚との違いがわかりません。しかし実際に解剖すると腸や心臓など内臓がとて大きくて血の量も多く、魚にはない肺もあります。違いがよくわかります」と小池さん。一方、安藤さんは「陸上の哺乳類と比べ、鼻が頭の上など高い位置にあり、鼻から出した音を増幅させるための脂肪のかたまりが頭頂部に広がっています。音をコミュニケーション手段としながら、水の中で特異な進化をとげていることが理解できました」と一言。二人とも、においや皮膚の硬さなどが実感できたとも。ちなみに安藤さんは高校生のころからクジラの研究をしてきた長崎大学を選びました。彼のようなケースはよくあるそうです。

「一年のときに海洋哺乳類の研究サークルに入部し、天野先生の北海道知床でのクジラ研究にも四十日間ほど同行しました。クジラを追いかけるときは、何日もろくに睡眠をとらず、生き物に自分の行動を合わせる先生の研究スタイルを目の当たり



フィールドワークが多いこともあり、小麦色の笑顔が健康的な小池さん(左)と安藤さん。

したイルカなどが早期に見え、情報が寄せられるのです。魚類だけでなく、海洋哺乳類を解剖することでどのようなことを学べるのでしょうか。 「私が特に重視しているのが、水のなかで生きることへの理解です。魚と比べ、海洋哺乳類は水から陸上がった進化した後、水に適應していったことで我々人間と同じ特徴を持っています。解剖し、魚と比べて観察することで水のなかで生きるためには何が大事なのか、生物の多様性や進化の過程を学ぶこと

にできたのは、将来を考えると、とても貴重な経験でした。天野先生は語ります。 「解剖して得た情報から、海洋哺乳類の保全に必要とされる基礎的な生活の特性や、人間が環境中に排出した有害物質の蓄積状況とその影響なども知ることができます。解剖実習が始まり、そこから発展して彼らの生活形態や群れを含む社会の構造などを研究し、ヒトや他の動物と比較することで、我々人類が抱える謎や課題を読み解く鍵になることもあります。」

水産学や海洋学でテーマを見つけるには、豊富なキャリアを持つ研究者の存在はもちろん、多様な特色を持つ海に開かれた長崎の特異な自然環境が欠かせません。

## 特異かつ多様な海域







# GS Rマインドを持ち 問題解決できるビジネス人材

## 国際ビジネス(PIUS)プログラム 経済学部

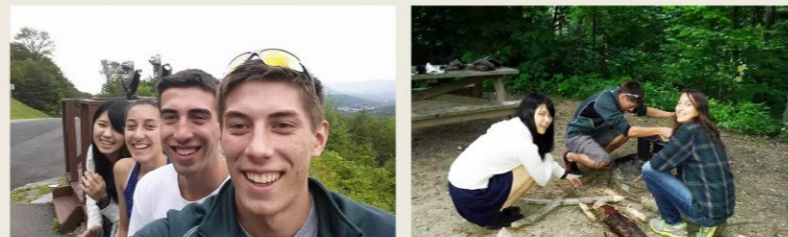
### 経

経済学部にはグローバル・独自の「国際ビジネス(PIUS)プログラム」があります。目指すのは「GS Rマインド」を持つビジネス人材の育成です。岡田裕正学部長にお話を聞きました。

「Jury」や「GS R (Global Social Responsibility)」とは、経済格差や環境問題などの地球規模の諸課題に対して、多様な文化的背景を持つ当事者の中で各々の利害対立を乗り越えて解決を目指す「志」です。海外だけでなく、長崎など地域で働くにしてもグローバルな課題と直面することはあります。そんな時にも誠意をもって他者と問題解決できる人材を育成します。文部科学省に採択されたプログラムで、今年で三年目ですが「このプログラムがあるから長崎大学を選んだ」という新入生も増えています。カリキュラムは四年間。まず、一年前期で国際的に

活躍するNGOスタッフなどによるGS R概論を学び、問題意識を共有します。本格的なスタートは一年後期からで、希望者は誰でも参加できますが、通常のコースでの学びと並行して実施されます。ネイティブ講師による英語での経済学の講義やプレゼンテーションの指導を受けて三年次の長期海外留学に備えます。三ヶ月以上の海外留学では単位取得を目指し、帰国後は英語による卒業論文を提出します。

特長的なのは留学生と半年間行う共修ゼミ。夫婦別姓や女性の社会進出など、さまざまなテーマで議論することで海外の実情や考え方の違いを学び、相互理解を深めます。内容はハードですが、希望する学生は年々増加傾向なのだとか。このプログラムの一期生として、パリの長期留学を終えて帰国した渡辺美咲さん(三年)のお話です。「半年間の留学で経済学の単位



「パリではテロなどもあり、自分の身は自分で守るサバイバル精神も身につきました。マイノリティの立場を経験したことで、帰国後は留学生にも積極的に声をかけるようになりました」と渡辺さん。今後は卒業に向けて英語での論文制作に取り組みます。



を取得し帰国しました。現地の授業はプレゼン中心で、時にはアドリブで行うことも。事前にこのプログラムで、英語でのプレゼンのトレーニングや、レポートの書き方を学んでおいて良かったです。また、留学生との共修ゼミのおかげで外国人とのコミュニケーションの取り方も自然に身につけていました。私の卒業論文のテーマは「企業の国際戦略」です。海外のデパートの家電売り場に行ってみたら、日本アームのわりには日本製品がほとんどなかったことから、日本にいると見えにくい企業の国際戦略を自分なりに調査しようと思えました。

高校生のころは漠然と留学に憧れるだけだったという渡辺さんも、いつしか客観的に世界経済を捉えられるように。GS Rマインドを持ったグローバル人材の卵が、着々と育っています。



# 文理融合の留学交流システムで 学際的な視座を持つ環境エキスパートに サマースクール 環境科学部

文理融合の環境科学部は、長崎大学ならではのユニークな学部です。近年注目されているのが「サマースクール」プログラム。立ち上げに関わった仲山英樹准教授にお聞きしました。

「四年目を迎え、参加大学は台湾、タイ、オーストラリア、スウェーデン、ハワイの五つの国と地域から五校と年々増えています。環境問題はグローバルでありながらローカルな要因を抱えており、世界共通の地域課題として各大学の関心が高いのです。また、長崎という風土が、海や山に囲まれ、地熱や農・水産資源、水資源など環境科学の研究に役立つ教材が揃っているのも、長崎で環境を学ぶメリッ

では多国籍の班ごとに環境をテーマに英語で議論を重ねます。そして翌年、今度はこちらの学部生が留学生の大学に短期派遣され、再会して共修する——相互交流が引き継がれていくのですね。

「しかも理系と文系双方の教員が担当しています。環境問題の解決には、理系の科学技術的な側面、文系の社会科学的な側面など、学際的な学修が必要です。双方の視座を備えた国際環境エキスパートを育てることができま

「このプログラムは、各国から留学生を受け入れ、インターンシップと学部生と共修するセミナーを体験させます。セミナー

海外校との交流協定では、同人数の学生の留学が基本ですが、英語圏の大学から日本への留学は、費用がかさんだり日本語の授業で単位が取れずに留年のリスクがあるなど障壁もあります。そこで環境科学部では、奨学金や留学内容の設定、授業の英語化など、海外から学生が



派遣された学生たちは、帰国してから翌年度の新生を対象に英語による報告会を行います(写真左下)。先輩たちが海外派遣の成果を語ることで、あとに続く学生のやる気を起こさせます。右下写真はタイに派遣されたグループで、右が山下さん。写真上はハワイでのボランティア活動のようす。

来やすい仕組みを作ったことが功を奏しました。プログラムに参加した山下清志郎さん(三年)のお話です。

「サマースクールでは、お互いの国の違いや改善点について各国の学生と議論することで、気候や社会背景の違いを超えて解決方法を探っていくことが理解できました。また、彼らの視点や課題解決に向けたどんな欲求や姿勢は刺激になります。一緒に学んだ留学生は僕らがタイに派遣されたときに再会し、プレゼンテーションや住民への聞き取りなどの手助けもしてくれました。共修で相互理解も格段に深まりました」。

将来的には大学院生も加わって国際的な共同研究ができる海外教育拠点を実現することが目標と先生方。環境科学部の特色を生かしたグローバル戦略が着々と進んでいます。





NAGASAKI UNIVERSITY BRAND

6

大学院

# 医療のニーズと工学のシーズをマッチング 未来医療技術を生み出す

## 医工ハイブリッド医療人コース 大学院医歯薬学総合研究科

**新** しい外科手術用のロボット  
ト鉗子。滑らず物がつか  
めるピンセット。医療用アプリ  
に、組織培養システム……。医  
療現場で活用する技術を開発す  
る、それがハイブリッド医療人  
コース。医歯薬学総合研究科と  
工学研究科が相互に乗り入れた  
医工連携の大学院コースです。  
担当の永安武教授のお話です。

「このプロジェクトは、平成二  
十五年の文部科学省の未来医療  
研究人材養成拠点形成事業で採  
択されたものです。要は医療の  
ニーズと、工学のシーズをマッ  
チングさせて新しいモノづくり  
を行おうというもの。毎週一  
回、双方の学生や教員、コー  
ディネーターが顔を合わせてア  
イディアを出し合う会議をやり  
ますが、非常に面白いですよ。  
手術の手法は経験と感覚の世  
界。一方、工学は圧力や耐性など  
の実験データによる定数を求め  
る世界。相互に納得がいくまで

議論が続きます。このコースの  
最大の特徴は、工学系大学院生  
も、医学系大学院生も、がんばれ  
ば工学と医学両方の博士号を取  
得することが可能なことです」。

工学生が手術の見学をした  
り、医学生が実験を体験できる  
だけでなく、海外研修のメ  
ニューもあるそうですね。

「昨年も学生が二人オランダへ  
研修に行きました。あちらでは  
ライデン、デルフト、エラスムスの  
三つの大学共同で医工連携組織  
『メデイカルデルタ』を作っていま  
す。そこには専門の医療コーデ  
ィネーターもおり、先行モデルとし  
て学ぶべきことが多いです」。

大学院一年（工学系）の朱睿  
さんもデルフト工科大で三カ月  
間研修しました。

「世界中から研究者や学生が集  
まっています。しかもアイ  
ディアが出て五日後には試作品  
を持つてくる。展開が速いんで  
す。それをみんなで試して応用

NAGASAKI UNIVERSITY BRAND

# ここで熱帯医学や公衆衛生学を学んだ社会人が、 世界の「現場」で即戦力に

## 熱帯医学研修課程

### 熱帯医学研究所

**あ** る人は、JICA(青年  
海外協力隊)で途上国へ  
渡ったものの力不足を実感し  
て、再挑戦するための学び直し  
で。またある人は、アフリカで  
クリニックを立ち上げるための  
ウォーミングアップとして。熱  
帯医学研究所(熱研)で行われる  
「熱帯医学研修課程」は、社会人  
を対象とした三カ月間の集中研  
修です。熱研熱帯医学教育室の  
佐藤光助教にお聞きしました。

「この研修課程は熱帯医学や公  
衆衛生の学びを世界の現場で活  
かすための、言ってみれば、社  
会人のための強化合宿。国内  
随一の熱帯医学の拠点として伝  
統と実績を誇る長崎大学だから  
こそできる研修であり、受講生  
は全国からやってきます。今年  
三十九年目で、この研修課程を  
出た人々が、JICAや国境な  
き医師団、そして各国の国際N  
GOで活躍しています。昨年も  
二〇一四年度の修了生がシエラ

レオネに渡りエボラ出血熱治療  
の最前線で活躍しました」。

分厚いシラバスをめくってみ  
ると、熱帯医学概論や熱帯感染  
症総論に始まり、寄生虫学、ウ  
イルス学、母子保健などの公衆  
衛生学、マラリアフィールドワー  
ク、渡航医学など、幅広いジャン  
ルの講義がぎっしりです。

「熱研の研究者はもろろん、外  
部からも第一線で活躍する専門  
の講師陣を招聘しており、その  
顔ぶれの多彩さも高く評価され  
ています」。

実際に本年度受講している看  
護師の玉田千歳さんのお話です。  
「私は今年の青年海外協力隊に  
応募しています。実は以前に二  
度インドにある施設でポラン  
ティアで働いた経験がありま  
す。そのとき、治療を終えた高  
齢の女性が退院後すぐに路上で  
物乞いをしている現実を見て衝  
撃を受けました。きつとまた病  
気になることでしょう。病気の



この日の実習では、免疫遺伝学の菊池三穂子講師のもとでPCR法を用いて増幅した遺伝子の多型を調べていました。検査によく用いられる技法で、原理がわかれば応用が利くのだそうです。

「志が一緒の仲間  
たちと海外での経  
験を語り合うこと  
もあります。このネット  
ワークも財産です」  
と玉田さん。

治療だけでなく、その人を取り巻  
く環境から改善する必要性を痛  
感しました。それで、以前の勤  
め先である聖路加国際病院の先  
輩から、「それなら私も行った長  
崎大学のこのプログラムが絶対  
おすすめ」と教えてもらいまし  
た。熱帯医学の基礎知識だけで  
なく、先生方の熱帯地域での臨  
床経験や地域住民へのアプロ  
ーチ法など現場で役立つ様々な知  
識を学ぶことができます」。

研修をきっかけに大学院熱帯  
医学・グローバルヘルス研究科  
の修士課程で本格的に学び始め  
る人もいます。熱帯医学研究所  
に所属する現場経験豊かなスベ  
ィヤリストは、熱帯医学や公衆  
衛生学の全国規模の人材育成だ  
けでなく、医学部の学部教育にも  
力を注いでおり、学部学生が刺激  
を受ける機会も多々あります。



を考える。大変刺激的でしたね」。  
朱さんは工学博士号だけでなく  
医学博士号取得も目指してい  
るのだそうです。  
「私の夢は脳波で機器を操作で  
きるコントローラーの開発に関  
わること。その臨床実験のため  
にも博士号を取りたい。この  
コースでは生命倫理が必修で、  
医療に関わる以上、倫理に反す  
る発明はしてはいけないと学び  
ました。とても大切なことだ  
と思います」。

朱さんは昨年、先端が自在に曲がる針を開発しました。臓器を避けながら進んでいくもので、タコの足の曲がり方をヒントにしたのだとか。



しなやかな動きと強く掴む力が特長的な外科手術用の「把持圧均一口ポット鉗子」。大学院山本都夫教授が院生と共同開発したものです。

NAGASAKI UNIVERSITY BRAND